

証言による『南京戦史』(6)

46期 敵本 正巳



第五章 南京占領戦と城内掃蕩

〔作戦経過の概要〕

南京城守備の中国軍は、12日夜間、完全に撤退した。攻囲中のわが第一線部隊は、12日午後には光華門および中華門正面で、破壊された城壁を攀じ登り、一番乗りの日章旗を打ち立てて「勝利の感激」にひたつた。しかし、引き続き城内に進入することなく、13日、各師団は予め示達された「攻略要領」にもとづき、城内での交戦態勢を整えて一部の部隊が進入し、掃蕩を開始した。

第十六師団の右側支隊(38i基幹)および紫金山を占領した歩兵第三十三聯隊主力は、13日、下関に進出し、揚子江を舟や筏で退却する敵に猛射を浴びせ、多大の損害を与えた。また、南京城西方の揚子江岸を北進した第六師団歩兵第四十五聯隊は、城外に脱出する敵に多大の損害を与えて14日下関に進出した。

城内における敵の抵抗は、予期に反して微弱であり、各処で若干の小競合いはあったが、城内掃蕩は15日には概ね終わり、17日には入城式、そして18日には城内飛行場で合同慰靈祭が厳粛に執行された。

その後、城内に進入していた軍の一部は、城内の秩序回復にともない、21日頃から逐次城外に退去し第十六師団主力が城内警備を担任した。第六師団の一部は城内に進入していたが、15日の軍命令により逐次、蕪湖に向かつて転進を開始した。

この間、城外においては軍の一部による散

残兵掃蕩、城内においては治安維持委員会による「匪民分離」が行われたが、住民も逐次、城内に復帰して戦禍の中にも平和な正月を迎えた。その後、治安維持委員会が結成されて軍および特務機関と協力して、治安の回復、難民の救済、宣撫工作が進められた。

一、中華門の占領と城内進入

第六師団主力(13i, 47i, 23i)は12月12日払暁、中華門正面クリークの線に進出し、城壁に向かって攻撃を開始した。中華門は城内から土囊を積みあげて二重三重に閉塞し、鉄扉をかたく閉じており、聯隊砲や野戦重砲による破壊射撃でも、ピクともし通い雨のうちに激しく第一線に射ち込まれる。クリークは幅三十〜四十メートル、深さ二メートル内外で徒渉できない。

歩兵第四十七聯隊第三中隊は、クリークを流れていた一隻の小舟を発見し、この小舟を利用して城壁の真下敵の死角にとりつき、梯子を城壁にかけて攀じのぼり、十五分後には城壁に登りついた。

城壁上では、守備の中国兵との間で猛烈な白兵戦がおこり、手榴弾が炸裂する。第二陣が登り、つづいて第三中隊主力が城壁上に登って、麻縄をおろして軽機・重機を吊りあげた。

そして、反撃する敵を撃退して、12日12時20分、完全に城壁上の一角を占領して、感激の日章旗を打ち立てた。

師団の最左翼にあった歩兵第二十三聯隊は12日早朝、クリークの線に進出し、砲兵が破

射撃で構成する城壁西南角の破壁口から、城内に進入する態勢をととのえた。砲兵は15時から被弾射撃を開始し、十五センチ榴弾砲の射撃によって、漸く狭い突撃路が開設された。

砲兵は市内には砲撃を加えなかった。そして、第二大隊は17時頃、この破壁口から城壁の一角を占領したが、城内進入は延期され、僅か第九中隊一コ中隊だけが、13日朝から城内に進入したのである。

このように、城壁を占領した歩兵第四十七聯隊および第二十三聯隊の一部が、城内の掃蕩に任じ、師団主力は城外に待機し、軍司令部は14日正午過ぎ進入して南京路の銀行の建物に司令部を置いた。

13日以後の城内進入、掃蕩の実状については、参戦者の証言によってうかがうこととする。

▼坂元 肥氏の体験記 (歩兵第二十三聯隊第二大隊長32期、現住所、鹿児島県曾於郡大崎町藪田一四八九一三)

(筆者注) 本体験記は昭和57年12月(偕行)誌に掲載されたものを中心にし、筆者がいただいた資料を加え、要約したものである。

私は、終戦後の23年夏、ソ連から帰還して百姓仕事に追われていたが、30年頃「下野一雷(当時第六師団参謀長)著・南京作戦の真相」によつて、はじめて当時の師団長、谷中将が、南京大虐殺の責任を負わされて刑死されたことを知り、全くわけが判らず非常に驚いた次第である。

その後、46〜47年頃であったが、朝日新聞に連載された「中国の旅」と題する記事を読み、余りの出鱈目さにあきれ、罵が煮えくりかえる思いがした。以来、朝日新聞の購読をやめたが、鈴木明氏の「南京大虐殺のまぼろし」を読んで、いささか溜飲がさがる思いがした次第である。

中略

聯隊は、12月12日午後、十五センチ榴弾砲の破壊射撃によってつくられた破壁口から、第九中隊が17時頃城壁を占領したが、主力はクリークの手前の部落に集結して進入を準備した。

翌13日8時頃行動開始、破壁口から城壁に登り、10時半頃までには西南角付近に集結することができた。私は8時過ぎ、工兵が架けた危なっかしい橋を渡って城壁にのぼったが、その付近に十体ばかりの敵の死体を見た。

その後、残敵を掃蕩するため、聯隊主力は城壁に沿い、私の第二大隊はその東方の市街地を北方に向かって前進した。

ちょうど12時頃、道路の左側に飲食店が店を開いており、主人らしい一人の男がいたので、支那ソバか何かを注文し、付近にいた者と一緒に、久しぶりに珍しい御馳走に舌鼓を打った。銀貨で代金を払ったところ、主人は非常に喜んでた。

小憩の後、前進をつづけて14時半頃、尖兵中隊の第六中隊が清凉山(五台山とも言うらしい)に達し、重砲六門を砲撃した。命令により前進を中止し、その夜は付近に宿営することになった。

一々家屋を点検した訳ではないが、前記の飲食店の男以外には市民も敵兵も見ず、また大した銃声も聞かなかった。

翌14日は後退して水西門の東側付近の市内に宿営し、翌13年1月3日、蕪湖に向かつて出発するまで、そのまま駐留したのである。

私が読んだ前記の新聞記事によれば「五台山(清凉山)で二万人以上虐殺された」とあるが、前記のとおり砲六門を砲撃しただけである。

その後我々の宿营地は五台山から遠くないので、もしそのようなことがあれば、それが判らぬはずがない。

また、「13日には下関に通ずる抱江門の扉を閉めて通行を阻止し、逃げてくる夥しい市民を機関銃で射殺した」という意味のことが書いてあったが、我々のいた五台山から抱江

門

門までの直距離は四〜五キロくらいである。もしも、そんなことがあったとすれば、機関銃の銃声が聞こえて来ないはずがない。

15日であったと思うが、分捕った乗用車で大隊附の渡辺軍医中尉を伴い、獅子山砲台を見に行くと、路上に森林や畑の中の道路を走っている。途中に雉がコノコノ出てきたので、十メートルくらいまで近づき、拳銃で撃ったが当たらなかった。また、獅子山付近でも、とくに変わったことは全然見かけなかった。挾江門内での虐殺の記事は作り事ではないかと思う。

次の16日は紫金山を見に行った。たしか中山門を通ったと思うが、その手前の商家らしき二階建ての洋館から少し煙が出ているのを見て、大きな火事にならねば良いかと思ったことを覚えていたが、中山陵、明孝陵は荒らされていなくなったが、中山陵の孫文と思われる白い大理石の像が、コールドールで少し汚されておき、心ないことをするものだと感じられた。

18〜19日頃、聯隊長の指示で、私の大隊が11日に占領した安德門(中華門西南・蕪湖街道上約三キロ)南側の標高八三メートルの高地に、占領記念の標柱を立てて行ったが、14日に戦場掃除をしたため、敵の陣地はすっかり埋められていたが、その付近で万余の虐殺があったというような形跡は全く見えなかった。

もっとも、雨花台は相当広いが、当時はそんなことなど思ってもみなかったことである。18〜19日頃と思うが、夕刻の暗くなりかけた頃、宿舎の西北方城壁の方向で、短時間であるが機関銃の銃声が聞こえた。変だと思つて翌朝、森木曹長を連れて水西門の城壁に登つてみた。門に通ずる道路の右側、城壁と水壕との間の斜面に、中国兵の死体が五〜六体転がっていた。これは、どこかの部隊が、規律に違反した捕虜を銃殺したのだというのを後で聞いた。私の南京における体験は、大体以上のとおりで、我々が翌年1月3日蕪湖に向かい出発するまで、付近の住民は帰って来ず、市内は至つて静かであった。

9〜12日の四日間の聯隊の戦果は、敵の遺棄死体約二〇〇〇、捕虜二四名で、捕虜は収容所に送られたはずである。

私の誕生日に關して一つの回想がある。それは支那事変の初期、首都南京の城壁に初めて日章旗を掲げたのは、勇敢な九州男子、大分歩兵聯隊の三明保貞大尉の指揮する中隊で、時は奇しくも、十二の字が四つ重なる、昭和十二年十二月十二日、十二時二十分であった。

軍司令官柳川平助中将は、親しく中華門南方約六キロの菊花台高地(占領後に命名)において、戦闘を指導されたが、私も随従して同時刻、城壁上に日章旗が飄るのを確認した。

軍司令部は翌々日の十四日午前、城内に入り、正午過ぎに南京路のほとりにある銀行の社屋に司令部を置いた。市内はすでに平静で、駐留間一発の銃声も聞かなくなつた。

これより先き、軍の兵站主任參謀小畑信良中佐は、南京攻略を予想し、兵站自動車中隊の貨車一輛に日本酒を満載して先遣して来た。幸いにも、この中隊が司令部入城の十四日午後二時に到着したので、隸下各部隊に配分するとともに、一樽を軍司令部に置いた。

夕暮迫る頃、司令部員は缶詰を開き、酒を交わして小宴をはった。私は宴やうやく酣のころ、軍司令官室の扉を押した。將軍は空虚なガラんとした部屋で、薄暗い裸ロソックの灯に照らされ、椅子に倚つておられたが、「今日は折よく私の誕生日に当ります。閣下も御光来いただき祝つて下さいます。閣下も御光来いただき祝つて下さいます」と述べた。「僕はお酒は飲まないから」と云われる將軍を、無理にお連れした。集中射撃をうけて、アッという間に殆ど全滅してしまつた。

平塚は、日本の神々に祈りを捧げることを目録としておられる、醜態無比の將軍に漸く冷酒一杯半を喉を通していただいた。入城後の十二月十四日、忘れられぬ誕生日の一酌である。

中国側証人たちは、市内いたる所に死体が転がっていたと陳述しているが、筆者などは街路上には一体の死体も発見しなかった。ただ、十六日午後、下関埠頭において、約千体以上の通常人の死体を見たが、すでに死臭を発しているものもあり、当日朝の出来事とは考えられず、大部分は十三日の攻略時の戦闘に際して、被弾したものと判断された。蓋し、下関は揚子江を越えて北方に向う逃走路に當っているからである。

(筆者注) 坂元氏および谷田氏の述懐によると、城内で銃声を聞かず、第十軍司令部は十四日には入城して祝い酒を汲み交わす程の平静状態であったことは、注目すべきことである。

▼藤田 清氏の証言 (独立軽裝甲車第二中隊本部曹長、後中尉。現住所、宇都宮市平出町二八六三)

中隊は12月12日早朝来、雨花台の敵を撃破しつつ本道を進出し、午前10時半頃、城壁前クリークの線に進出した。本道上に觸形にならんので、城壁の銃眼をめがけて射撃したが、屋すきまで、こちらが射れば沈黙するが、射撃を中止すればまた射ってくる。わが砲兵が城門上の望楼を集中射撃して、これを破壊したが、門原はビクともしない。

正午すぎ、わが軍の飛行機三機が飛来して爆弾を中華門めがけて投下し、城門一帯は黒煙雲々として爆煙に包まれた。この状況に乗じ、工兵の決死隊十名が架橋材料、梯子などを担いで、輕裝甲車の間を縫って前進し、クリークの半分ぐらまで押し出したが、敵の集中射撃をうけて、アッという間に殆ど全滅してしまつた。

第一次決死隊が全滅したにも拘らず、第二次決死隊が前進しようとする。彼等の顔には死の怖さは見られない。進めば斃れることは判っているが、任務に殉せんとする神様のよ

うな崇高さが見える。工兵精神の真髓にはま  
ったく頭が下がった。  
このままでは、第二回の決行は無理である。  
歩兵が機関銃を民家の二階の屋上に据え  
て、機関銃の支援のもとに、歩・工・戦一体  
となって決行することになった。

歩兵が機関銃や歩兵砲を民家の屋上に据え  
て射撃するが、敵の銃砲火は一向に衰えず、  
中隊は敵の十字火の真只中に居るようであ  
った。  
中華門の戦闘状況を撮影しようとして、道  
路横の壕から半身を乗りだしていた福岡日々  
新聞の植山記者は、敵の銃弾で頭半分を射ち  
砕かれて惨死してしまつた。第一小隊の松永  
上等兵の軽装甲車に同乗していた報知新聞の  
中山記者は、大南京攻略戦の生々しい報道を内  
地に伝え、大きな反響を呼んだ。

12月12日12時20分、歩兵第四十七聯隊の一  
部は、中華門の左側の城壁に梯子をかけてよ  
じ登り、城壁の一部を占領した。城壁を占領  
した歩兵は逐次地歩をひろげ、城門正面の歩  
兵・工兵もクリークの低いところに架橋し  
て、対岸にとりつくことができた。そして、  
13日払暁を期して、城内掃蕩部隊は城内に進  
入したのである。

これより先、日時はよく覚えていないが、  
軍から南京入城に関する厳しい示達があつ  
た。かなり長いものであつたが、大要次のよ  
うであつたと記憶している。  
「皇軍としての矜持を守れ、入城部隊を制  
限する。中国民衆には道義をもって接せよ  
焼くな・奪うな・犯すな、不法行為には厳  
罰に処する」

この示達は、中隊長の命令によつて、戦闘  
中の各小隊長・段列長に伝達し、兵隊たちにも  
も伝えて歩いた。  
12日夕刻、わが中隊は約五百メートル後退  
して、厳しい警戒のもとに夜を徹し、13日は  
同地で炊飯・車輛の整備をして、入城の日を  
待っていた。当時、中華門内には数千の土囊  
が積みあげて門扉が閉じられ、この土囊を取  
り除き、クレークに重車輛が通過できる橋を

架けるには数日を要する状態であつた。  
そこで、中隊はひとまず、雨花台要塞の山  
麓にある兵技専門学校(兵工廠?)に宿営す  
ることになった。ここには前に述べたよう  
に、半焼けた中国兵の屍体が四、五百遺棄さ  
れていたが、各所で兵士の死体が見たが、非戦  
闘員の死体は見なかつた。日本軍の進撃が予  
想外に早かつたので、敵は屍体を城内に収容  
することができなかつたのであろう。  
私たちの宿営地の隣りには、第百十四師団  
の山田部隊が居つたが、この部隊は城内に進  
入せず、雨花台要塞一帯の残敵を掃蕩してい  
た。  
城内進入直後の状況――  
私は12月14日、隊長の命令により、前田中  
尉、宍倉主計准尉(ともに戦後死亡された)  
に従つて、兵二名を連れて徒歩で城内に入  
り、中隊の宿舎を探すために、あちこちと証  
けまわつた。  
第一目標は、城内飛行場であつた。城内飛  
行場は光華門・通済門の北方にあたり、中山  
東路の南側にある。ここは広場があり車輛を  
入れるのに適當であつたが、将来飛行場が使  
用するであろうと考へて中止し、ほかの中国  
軍の兵舎・学校・官庁の建物を探した。なか  
なか適當なものがない、軍官学校にきた。あ  
まり堂々として立派な建物であるので、これ  
も上級司令部が使用するであろうと遠慮し、  
隣りの教導隊の建物に入つてみた。

ここで、奇しくもルノー戦車(仏国製)を  
見つけたので、「ここが良いぞ」と皆で兵舎  
を仔細に検分した。車庫もあり、整備用施設  
もある。同所に「藤田部隊宿舎」と大書し  
て、中山路を経て雨花台下の宿舎に帰つた。  
軍官学校を見ている頃、紫金山方向で銃声  
聞いたが、恐らく敗残兵掃蕩の銃声であつた  
であらう。  
中山路は、市中央の幹線道路で各所に戦禍  
の跡が見られ、余蘊がくすぶつてるところ  
もあつたが、街は静かで人影を見ず、途中で  
憲兵と紅色の袖なしを着て背中に卍字と描い  
た中国赤十字会員の一群に出会つた。この道  
筋では死体など一つも見なかつた。  
ただ、奇異なものが一つあつた。それは、  
中山路十字路のロータリーの中央のちょうど  
トーチカのような形をした建物で、土で覆わ  
れていたが、その近くに憲兵が立つていた。  
――挾江門、下関の状況――  
15日であつたと思うが、中華門の土囊が取  
り除かれて通行できるようになつた。命令受  
領のため、側車付自動二輪車(サイドカー)  
に乗つて、首都飯店の軍司令部に行つたが、  
首都飯店は中国軍の高級司令部跡らしく、彼  
等が周章狼狽して逃走した跡が歴然としてい  
た。重要極秘書類が散乱し、蔣中正昭と銘記  
した海軍少尉任官の短剣、日本の短刀のよう  
なもの、第二司令官の刻印のある公印、など  
が投げ捨てられていた。しかし、付近には屍  
体らしいものを見なかつた。  
命令受領後、揚子江を見たので、挾江門  
を経て下関に出ようとしたところ、水師府と  
いう瀟灑な建物があつた。日本の海軍省か、  
鎮守府司令部にあたるのであろう。その付近  
の岡の斜面に「仁・義・礼・智・信」と書い  
た大きな看板があつたことを覚えていた。  
挾江門をくぐつて下関に出たら、この付近  
は全く焼野原で死屍累々、戦場掃除が既に始  
まつており、道路は片づけられて通行には支  
障なかつた。死体を揚子江の中流に運んでは水  
葬にするらしい。一面の焼野原では火葬もで  
きないし、土葬もたいへんな手間がかかるか  
らであらう。寒かつたが、腐乱しているもの  
があつたから、相当以前のものであろうと感  
じた。

多数ではなかつた。  
当時の上海派遣軍参謀・橋原主計氏は、  
城内各方面の屍体を下関に集めたといわ  
れるので、相当多数の屍体があつたものと  
推定される。  
――その後――  
その後、中隊は21日、城内の軍官学校教導  
隊の校舎に移転した。この頃には、軍の特務  
機関や紅卍字会の活動により、戦禍の跡も整  
理され、治安維持会も設立されて、街に住民  
の姿を見るようになった。  
私たちは城内の宿舎で、「餅焼き」「しめ  
縄」を飾つて正月を迎えたのであるが、公務  
以外には兵隊の外出を禁止して使つた。  
中国人を七、八人炊事や雑役に使つていた  
が、隊内を家族と一緒に住み込み、十四歳の  
陳少年は「せむい、日本に連れて帰つてくれ」  
と強く頼んでいたことは、皆がよく知つてい  
ることである。私たちは、戦闘以外では中国  
人と仲良く暮らしたのである。  
なお、「婦女子に対する暴行、強姦問題」  
であるが、

私の中隊が南京の軍官学校に駐留してい  
た頃、夜になると、こっそりと隊を抜けた  
才男が二人居るといふ話が、戦友仲間であ  
つた。将校は誰も知らず、私も何も  
報告しなかつたが、Fという現役あがり  
Oという召集兵であつた。この二人が部隊  
を抜けて何をしたらかを究明したわけは  
ないが、恐らく女遊びに行つたものと想  
像する。

私たちの中隊は軍紀厳正な部隊であつた  
が、百二十名の中に二名の不心得者が居つ  
たことは事実である。  
南京滞在の間、慰安所があつたところ、どこに  
開設されたか記憶にないが、場内飛行場近  
くに日本で言う遊郭のようなものがあった  
ことを覚えていた。中国在来のもので、兵  
隊たちは時々遊びに行つた。

南京占領後、治安も落ち着き、住民も帰  
つて来た頃、軍の慰安所が開設されないう  
期間のあいだに、極く一部の者が婦女子を

期間のあいだに、極く一部の者が婦女子を

犯したことはあったかも知れませんが、婦女子に対する強姦・暴行が二万件もあつたなどは到底信用することはできません。重ねて申しますが、私が実際に見たのは極く一部の地域であります。非戦闘員の屍体はほとんどなかった。もし、市民が死亡した人があるとすれば、その人は運が悪く、流れ弾にやられた人と思います。

▼「南京虐殺説」に思う。守田省吾氏(歩兵第四十七聯隊通信班長、47期現住所、東京都杉並区善福寺一八一十二)

「昭和十二年十二月十二日、中華門一番乗りを果したのには、わが聯隊の第三中隊の將兵であつた。城壁の地歩を拡大して、その後、軍旗を率じて聯隊本部とともに入城した。その当時、中華門付近の城内には殆ど敵兵を見ず、ましてや、一般住民は発見することさえ困難な状況であつた。城内各所から散発的な銃声が聞こえていた。少なくとも、われわれの正面では二十万人の虐殺なども、ないも奇らぬことであり、まったく根拠のない諒略とか考えられない。」

また、安部康彦氏(前出)は述懐する。「私は当時、内地帰還の内命(陸軍士官学校予科区隊長)をうけていたので、聯隊主力の駐留地で、もっぱら休養につとめた。城内に進入したのは、入城式と慰靈祭の二回だけであるが、虐殺の時、話など全然聞かなかつた。」

後日、戦犯問題がおこり、大分合同新聞記者・平松慶史氏が各方面を調査するに及んで、初めて虐殺事件なるものを知つた次第である。

「城内南部・西南部の惨状」の考察  
ダーティン記者は「市の南部および西南部は、日本軍の砲撃によって、ほとんど破壊しつくされており、中国人の一般市民の死体がいたるところに転がっていた。その総計は、お

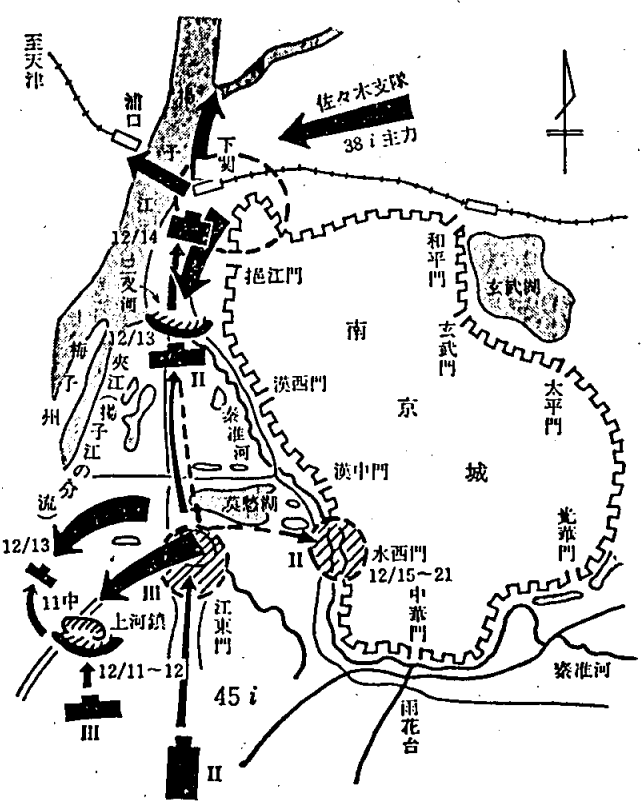
そらく戦闘員の死者の総計と同じくらいに「なるであらう」と述べ、「大分郷土部隊奮戦記」によると、「第四十七聯隊は主力をもつて四眼井高地を中心に、便衣の敵散兵を徹底的に掃蕩した」、さらに「熊本兵団戦史」では、「12日から13日にかけての南京城壁の戦いでは、中国兵約一五〇〇に損害を与えた。この戦闘損害には城内の掃蕩を含む……などを引用して、中華門に入城した第六師団が、残虐な城内掃蕩をしたと称するものがある。(ゴジック、筆者)

しかし、日本軍は城内の住民居住地域を砲撃せず、中華門城門の破壊射撃、城壁の破壊射撃等を行なつただけである。その際の遠弾が城内に落下したかも知れないが、城内の破壊の跡は恐らく爆撃の跡であらう。また、城内の死者の数があつたことは、前述の坂元氏、藤田氏の証言で明らかであり、当時の「朝日」記者近藤氏(現在、科学振興センター代表)は「中華門は激戦で日本兵の死体も、中国兵の死体もあつたが、それ程多数という印象はない。市民の死体は全く見当たらなかつた。」と述べ、「報知新聞」から「毎日」のカメラマンに転じた二村氏(東京在住)は「歩兵第四十七聯隊について城壁をよじのぼつて城内に進入したが、市内にはそれ程死体はなかつた」と述べている。

歩兵第四十七聯隊主力は城外に駐留して、一部の兵力が城内掃蕩に任じたのであつて、同聯隊中隊長、安部康彦氏(前出)は「掃蕩といつても、敵の遺棄した軍服、兵器、装備資材の跡片づけが主な仕事であつた」と述べている。

また、第十軍参謀、谷田勇氏の述懐(前出)にあるように、12月14日は市内はすでに平静で殆ど一発の銃声も聞かず、司令部の屋内では、誕生祝いの酒が飲みかわされる程であつた。

上河鎮、下関付近の戦闘 (12月12日~13日)



の情報に接し、急遽、歩兵第四十五聯隊および騎兵第六聯隊を同方面に派遣し、この敵を攻撃させた。

歩兵第四十五聯隊は、第三、第二大隊の順序で縦長に配置して、この敵を攻撃した。第三大隊は12日夕から13日朝にかけて、深い朝霧の中で、脱出する敵の大集団と激烈な近接戦を交え、第二大隊は、第三大隊の右側方に進出した。この付近は、クリークや湿地が多くを超越前進し、所在の敵を撃破しつつ14日、下関に進出して捕虜約五千内歩兵を収容した。

同方面の戦闘については、歩兵第四十五聯隊史を中心に、第二大隊長・成友藤雄氏、師団通信小隊長・鶴岡敏定氏、配属独立山砲兵小隊長・高橋義彦氏らの証言により、その真相を述べる。

西善橋より江東門に向かう——

歩兵第四十五聯隊は、12月10日、第三大隊(大隊長小原重孝少佐)を先頭として、聯隊本部、第二大隊(大隊長成友藤雄少佐)、師団予備となつた第一大隊、騎兵、独立山砲の順序で、西善橋から南京城西側の湿地帯内に通ずる狭い堤防の道を、一列縦隊となつて前進した。この付近は、クリークや湿地が多くを超越前進し、所在の敵を撃破しつつ14日、下関に進出して捕虜約五千内歩兵を収容した。

い。左は揚子江である。堤防に沿つて川幅五メートル大きな砂洲があり、その前方には葦の茂る大きな砂洲があり、砂洲の向こうを揚子江の本流が流れている。

聯隊は、夜になつても行軍をつづけ、12日早朝、先頭部隊は上河鎮西南方の堤防上に進出した。ここは、水西門西方三キロの地点である。

(45:史より)

聯隊長は、第三大隊をもつて、水西門西方約三キロの上河鎮の敵の攻撃を命じたが、突破することができず夜を迎える。第三大隊には依然攻撃を続行させるとともに、新たに第二大隊をもつて、江東門（水西門と上河鎮との中間）の占領を命じた。

江東門—三叉河—下関の戦闘

第二大隊は、第三大隊方面の銃声を左に聞きつつ、第七中隊を先頭としてクリーク堤防上の道を前進した。道路以外は湿地帯であったが、大なる抵抗をうけることなく、江東門を占領した。当時、城内の中国軍は、12日夜から城外脱出をはかり、下関から揚子江に沿って水西門外方向に殺到しつつあった。13日早朝、第二大隊は折りからの濃霧に包まれて、莫愁湖をはじめ大小多くの池沼を縫って、敵を撃破しながら前進し、下関南方一五〇メートル、三叉河南方に進出した。

三叉河の部落に拠る敵は、背後を揚子江にはばまれ背水の陣を敷いて頑強に抵抗したが、追及してきた機関銃中隊、大隊砲、連射砲が第一線中隊の攻撃を支援するや、敵は再び下関方向に退却を開始した。一時、展開約二十メートルのクリークを挟んで激戦が展開し、敵の迫撃砲に悩まされたが、敵は多数の戦死者を残して退却し、クリークは長さ四、五十メートルにわたり、敵の屍体で埋まった。また、第七中隊の前田吉彦少尉の小隊は、江東門西北、揚子江岸にある南京無線台を占領したが、構内には鞍をつけたままの軍馬が多数放置されていた。

14日早朝、第二大隊は下関に向かい、敵の抵抗をうけることなく前進し、三十数門に及ぶ砲車、大量の小銃、機関銃および数百頭の軍馬を虜獲し、下関において五、六千名に及ぶ捕虜を得た。

この頃、城門から第十六師団の部隊が進出し、揚子江上には敵隻のわが駆逐艦が溯航し、命令をうけていたので、戦場を第十六師団に申し送り、江東門に引き返した。

成友藤夫氏の証言（歩兵第四十五聯隊第二大隊長、28期、現住所、福岡県田川郡香春町柿下八五三 昭和59年没）

（注）成友氏は古武士の風格を帯びた第一線部隊長であったが、戦後、郷里に帰還後は病氣療養中であった。「借行」編集担当理事、久保三好氏（少24期）の尽力により取材した手記『追憶』、および証言をまとめて掲載する。

13日払曉、折りからの濃霧を衝いて前進し、敵の抵抗を撃破して三叉河（下関南方約一キロ半）南方に進出した。三叉河は当面の敵が最後に抵抗したところである。揚子江以外に逃げ場のない、まったく背水の陣である。敵は部落に拠り頑強に抵抗する。とくに江岸に近い三階建ての大工場に立て籠った敵が最も手剛く、窓という窓の銃眼から、撃ちまくるので始末におえない。

ちょうど折りよく駆けつけた機関銃中隊、大隊砲小隊と配属の連射砲小隊に護衛射撃をさせ、放火したので、さすがの頑敵も抵抗を断念して、クリークの北岸に潰走したが、その大部分は、わが銃弾にたおれた。わが第一線は早速、部落を占領してクリークの南岸に進出したが、約二十メートルを距てた北岸から猛射をうけ、さらに迫撃砲弾が飛んでくる。二十メートルの近距離で互いに射ち合ったのは、初めての経験であった。二十分ばかり撃ち合い、敵は多数の死体を遺棄して下関方向に退却した。

クリークは長さ四十〜五十メートルにわたり、全く敵の屍体をもつて埋められ、これを踏んで渡るという景況を呈した。……時既に薄暮、聯隊命令により、現在地で態勢を整え、明14日、下関に向かう前進を準備した。この日は、朝からの混戦であったが、敵に与えた損害は勿論わからぬが、死者数百に及んだであろう。大隊も戦死十数名を出した。……

往く、砲車三十数門、自動車十数輛、小銃、機関銃など、数えるに達しないほど虜獲した。英國旗や米國旗を掲げた家屋には、多数の中国兵が隠れていたが、第三國の國旗の下ではどうすることもできない。途中、敵の抵抗をうけることなく下関に到着すると、中国兵が広場一杯に溢れ出した。悉く丸腰である。とおとなしく整列した。その数五千〜六千名、腰をおろさせて周囲を警戒すると、これらからどんなことをされるかと思つたのである。おどおどした表情の者が多かつた。

そこで、「当方面の戦闘はこれで終わつた。日本軍は捕虜に対しては、乱暴は加えず。生命は助けてやるから、揚子江を渡って郷里に帰れ」と言つた。

ところが、「大人は揚子江を渡って帰れと言われるが、船がないではないか。船はどうしてくれるか」と申し出たので大笑いとなつた。かれこれしているうちに、城内から第十六師団が進出してきて、威容堂々と碇泊し、その乗組員の一部が上陸してきた。折りから、「江東門に下がって宿営すべき」聯隊命令に接したので、第十六師団に申し継いで後退した。このとき、第八中隊は、中隊長以下全員、鹵獲馬に乗り意気揚々としていたのであるが、敵がないので放棄してしまつた。

想えば、11月16日の転進以来約一ヶ月、夜を日に繼いでの強行軍に、はたまた戦闘に、随分部下に無理な要求も、二十数名の戦死者を出したが、敵の首領を虜獲したのは、せめてもの慰めであつた。

翌15日より21日までの間、水西門内に位置して城内の警備にあつた。時々、小火災があつたほか、事故なし。17日、城内飛行場で軍司令部主催の慰霊祭があつた。先日虜獲した自動車で乗りつけたところ、よほど偉い人とも思つたのか、会う人ごとに敬礼されたのは、いささか照れくさかつた。

鶴岡敏定氏の述懐（第六師団通信隊小隊長、48期、45歳、史編纂委員会事務局、現住所、東京都杉並区成田東四二八一六）

捕虜は、きわめて、なごやかな状況で収容されているが、捕えられた場所は、三叉河を北行して下関の中山北路と交叉する付近で、14日早朝である。第十六師団に引き渡した時機は、14日午後と推定される。

その後、第二大隊は引き返して江東門に集結し、聯隊主力は城外、第二大隊は水西門内に駐留して城内の警備にあつた。

城門の通行は、住民は難民証を示せば自由に通行できた。城外には師団の將兵が多数駐留していたので、不審な者は通行できない状況であつた。拘留期間は、12月15日〜21日までの短い期間で、住民との接触は少なかつた。外国人の記録によると、「12月19〜20日の両日は、日本兵の放火が激しく、特に日夜は、天を焦すほどの大火があつた」といわれるが、中華門付近では小火災はあつたが、大火災はない。限られた地区に居るので、大火を出せば自らの住居を失う結果となるので、火災には注意した。

また、15日夜および20日〜22日頃、水西門外または漢中門外で、数千人の非戦闘員を含むむ残兵が機銃掃射で殺害されたという記事があるが、同地付近の警備に任じた第二大隊長、成友藤氏は「小火災のほか、異状なし」と述べている。

（シツク、筆者）

極東軍事裁判における「南京大虐殺」事件なるものは、被告に正当な弁護の機会を与えない勝者による審判である。松井大將、谷師団長処刑の訴因も、歴史の中で究明せねばならぬ真実があると考へる。第十二中隊長、田中軍吉大尉の三百人斬り、向井、野田少尉の百人斬りも、武勇を誇張せんとした当時の新聞記事が、証拠として裁判に採り入れられた結果である。当時の報

道関係者は責任を回避して、証言をしなかつたから、彼らは雨花台の刑場の露と消えた。われわれ白兵戦の戦闘者の体験からみれば、百人斬りなどはナンセンスである。それが歴史の真実として定着することを、黙視することはできない。

### 2、上河鎮、新河鎮の不期遭遇戦 (45イ史より)

12月12日、上河鎮の敵を攻撃すべき任務をうけた第三大隊は、第十一中隊を先頭にして揚子江岸沿いの堤防の道を進出した。

尖兵小隊(小隊長赤星少尉)は前進中、午後3時頃、突然前方のトーチカから射撃をうけて停止した。トーチカの前方は水田が連なり、遮蔽物がない。

大隊長小原少佐は、第十二中隊(中隊長・田中平吉大尉)を戦線に投入して、この敵の攻撃を命じた。機関銃が射撃をはじめ、敵味方の手榴弾が炸裂する。第十二中隊は敵陣に突入してこれを占領し、引き続いて追撃にうつった。

ここで、第十一中隊が第一線となつて、暗夜のなかで細い道を進撃中、上河鎮の部落を過ぎたところで激しい敵の射撃をうけた。前方の部落の入口付近、道路両側の陣地から射撃して来る。敵の突然の射撃で、中隊長当番・野元上等兵が戦死し数名の負傷者が出たが、戦況が落ち着いたので、近くの民家に入つて遅い夕食をとった。

真夜中の12時頃、「第十一中隊は左追撃隊となり、工兵二コ分隊、山砲一門とともに、江岸堤防沿いに下関方向に進出し、敵の退路を遮断すべき」命令をうけた。中隊は、翌13日払曉の5時30分出發と予定し、約一キロ後退して上河鎮の焼け跡の部落で、爾後の前進を準備した。小行李から弾薬を補充したが、携行弾薬は百六十発。

### 第十一中隊新河鎮の激戦

中隊は大隊主力と別れ、出發が一時遅れ、6時30分、その尖兵が前進すると間もなく、敵の將校斥候と遭遇して直ちに戦闘配置につく。敵の大集団が、薄暗い本道を南下し

てくるのが見える。後から後から押よせる敵の兵数は不明であるが、二千や三千というものではない。敵の先頭との距離は百メートルもない。軽機を据えたと直ぐ射撃開始。敵は後から後から押しよせてくる。

中隊長は中隊の全力を展開した。右第三小隊(小隊長赤星少尉)、中央第一小隊(小隊長長浜田准尉)、左第二小隊(小隊長向井准尉)。中隊長は、第三小隊に「斜め右の墓地の占領」を命じ、やがて、中隊の全正面で白兵戦が起こり、混戦となる。雲霞のような敵の大部隊が、ラッパを吹きながら突撃してくる。彼我の雄叫び、手榴弾の炸裂、戦場は叫喚の巷となつた。

「中隊長、戦死」悲痛な叫びが聞えた。小隊長が走り寄り、中隊長は仰向けに斃れて、こめかみを射ち抜かれていた。戦闘が続き、擲弾筒手の分領上等兵が、敵の手榴弾にやられ重傷で口がきけない。連絡下士官重信伍長負傷、軽機関銃の銃身が真っ赤に焼ける。すぐ横の池の水をブツブツかけて銃身を冷やす。小銃弾を射ちつづき、敵の死体から携帯弾薬を取って射撃をつづけた。敵は日本軍の三八式歩兵銃を持つていたのである。

田圃のまん中に、敵が迫撃砲を据えようと試みて来る。すかさず、集中射撃を浴びせてこれを制圧する。激しい戦闘がつづく。山砲兵が砲を路上に引っ張りあげる。数名が傷ついたが、砲を据えるや敵の真っ只中に砲弾をうち込む。砲弾は僅か十八発しかない。全弾発射。

陽が高くなる。さしもの敵の攻撃も、時間がたつにつれて鈍ってきたようである。敵は横へ横へと移動して揚子江岸に殺到し、河に飛び込み、あるいは筏や舟で逃走を企てる。やがて銃砲声やみ、戦闘が終わつた。耳が鳴り頭がボーッとしている。あたりは死屍累々として広い田圃をおおい、目を覆う惨状である。中国兵は突撃の姿勢で倒れていて、銃に着刺している。味方の戦死者、負傷者も多い。時刻は10時30分、戦闘は突に四時

間も続いたのである。

第十一中隊の損害と戦果は次のとおりである。  
戦死 中隊長大團大尉以下十六名  
負傷者 三十六名

敵の死体 参謀長以下二千三百名  
軍旗二旗 迫撃砲、チニコ機関銃、その他多くの武器、弾薬を鹵獲した

なお、第十一中隊は本戦闘によって、師団長、谷中將から賞詞を授与されたのである。一方、第三大隊主力は、13日未明、江東門、陸海軍監獄正面において、脱出する敵の大集団と不期遭遇戦を交えた。濃霧の中の白兵戦で、歩兵砲小隊長岩間少尉戦死、第九中隊長前川大尉重傷、その他多くの戦死傷者を出した。

15日、師団長、旅団長、聯隊長の戦場視察があり、第十一中隊の一コ小隊が戦場掃除にあつた。中隊長戦死の場所には、白木の墓標をたてて冥福を祈つた。

### 高橋義彦氏の証言 (第六師団配属、独立山砲兵第二聯隊本部附中尉、47期、現住所福岡県久留米市高良内町二六三九一五)

〔筆者注〕 高橋氏は当時、6D左側支隊の山砲兵小隊長として参戦された。同氏は、当正面は死体が密集し、服装も区々であったので、遺棄死体のみを見れば、住民ともども虐殺されたと思認される虞があるとして、昭和13年2月12日の福岡日々新聞の抜粋記事まで添えて、当時の戦闘の概況記事を寄せられた。

左側支隊は45イ第十一中隊長大團大尉を長とし、配属部隊は山砲一コ小隊(砲一門)と、工兵一コ小隊(折疊舟九隻)、騎兵一二欠、大隊は二百五十名ぐらゐであつた。支隊の任務は、下関に進出して敵の咽喉部を扼守し、敵主力の退路を遮断することであつた。

12月12日夕刻、棉花地を出發し、敵の抵抗を排除して漸く新河鎮の焼け跡の部落に進出

した。大團支隊長は、夜間の前進は不可能と判断し、明払曉、水陸両面より前進するに決し、待機中、夜の明けやらぬ弘弘から敵の総攻撃をうけた。

13日5時頃から14時頃まで、反復突撃をうけた。砲兵は全部零距離射撃の連続で、砲腔の中を通ってくる銃弾もあり、血のしたたる所謂「血弾」をこめて射撃した。そして、遂に白兵乱闘の状況となつた。

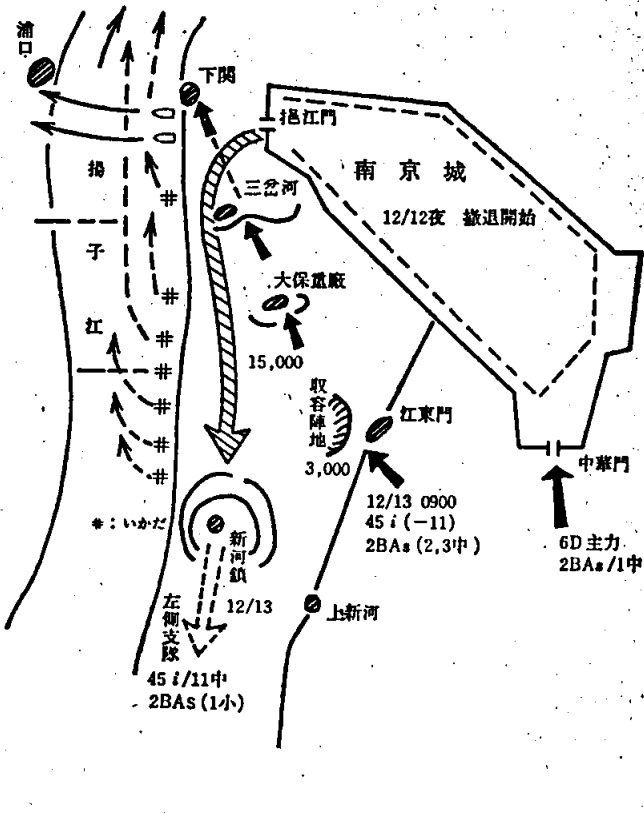
当初は軍官学校生徒が第一波で、さすがに勇敢で我々を手こずらせたが、第五波、六波ごろからはやや弱くなつた。9時頃からの突撃部隊はヘッピリ眼の民兵で、その半数は督戦隊である彼等の味方から殺されていく。江岸の膝を没する泥地でも、死体を枕木を敷きつづり廻って白兵戦が続いた。

11時頃から敵は戦意を失ひ、裸になつて揚子江に飛び込むもの、川岸の丸太材を縛りあわせた筏により、対岸に渡ろうとするものなど、あたかも平時の海水浴場のような光景を呈したが、わが銃砲弾を浴びて混乱裡に、揚子江を血に染めつつ下流に押し流されていく。

夕刻頃、47イの第三大隊が救援に駆けつけた。遺棄死体の服装は区々であったが、一般住民は混入しておらず、すべて武器を執つた戦闘員であつた。また、付近には住民は一人も居らなかつた。わが方の損害は、戦死傷約八十名であつたと思つたが、山砲兵小隊は戦死半数が損害をうけたことなる。(注、小隊の約47イ第三大隊は、13日16時頃に駆けつけてくれたが、その時は既に戦闘は一段落しておつた。死者の収容、負傷者の後送、火葬などに、徹夜で協力してもらつた。同日は新河鎮に宿營した。

翌14日、45イ主力は下関に進出後、すぐ江東門に引き返したので、支隊は14時頃、聯隊

高橋義彦氏による回想図



本部のある江東門(莫愁湖西側)に到り、16日までに駐留して、人馬の休養・整備につとめた。17日早朝江東門出発、第十八師団配属のため、漢中門―中山門を経て広徳―杭州に向かった。(ゴシック、筆者)

戦闘および城内の見聞記  
一、督戦隊について  
13日11時頃、敵の突撃部隊は便衣を着た民兵たちで、質が落ちてヘッピリ腰で押し出してくる。異様な感じがした。見れば、私たちの抵抗をうけて反転しようとする兵を督戦隊が後方から射殺している。  
督戦隊員は「督戦」という腕章をつけ、大型モーゼル拳銃をかまえて約四歩間隔に横に展開しており、突撃部隊を押し出すのが任務であったようだ。  
味方撃ちで殺された敵の死体は、死体総数の約一割、三百名を下らないと観察した。

# 七十倍の敵と血戦 砲兵陣地を死守

## 十六人斬の高橋鬼中尉

河野派特派員

南京陥落の戦況は、市民の間に「敵軍の進軍は止まるまい」との不安な空気を醸成している。この不安を打ち破るべく、本報特派員は、南京の戦況を現場から詳しく伝えることに決意した。本特派員は、南京の戦況を現場から詳しく伝えることに決意した。本特派員は、南京の戦況を現場から詳しく伝えることに決意した。

「揚子江に注ぐクリックにおかれた中国人の死体」の撮影者は、川越市在住の村瀬守保氏であり、12月13日から一週間後に撮したとのことであった。  
恐らく新河鎮の戦闘時の死体が、下流に押し流されて、支流との合流点付近に吹き溜りとなったものと推察される。

この新河鎮の戦況は、敵軍の進軍を阻止する重要なポイントであった。高橋鬼中尉は、十六人斬の戦功を挙げ、砲兵陣地を死守した。この戦況は、南京の戦況を現場から詳しく伝えることに決意した。

五、聯隊は17日早朝、城内を通過して中山門を経て広徳に向ったが、城内は平靜であり、城外から帰ったと思われる一般市民の姿が散見された。  
中山門外で約百ぐらいの死体を整理中であつたが、入城式のための道路啓開が進んでいた。死体の中には一般住民の姿は見えなかつた。

六、原田聯隊長は毎日、城内の6D司令部に行つておられ、16日には「五台山まで行ってきた」と話しておられたが、別に変わった話はされなかつた。  
また、駐留間は、6D司令部から軍紀の維持について厳しい通達が出され、厳正に守られており、掠奪、強姦などの風聞は聞かなかつた。



### 3、中国側発表の「虐殺、遺棄死体数」の考察

東京裁判においては、埋葬者の盛世徹・昌開運は、上新河の遺棄死体二、八七三と証言し、紅卍字会・崇善堂埋葬隊は、左表のように証言している。

紅卍字会と崇善堂は別々に埋葬したのであるから、遺棄死体は合計三〇、八五一となる。(本表は、両埋葬隊が、遺棄死体発見場所、埋葬数を詳しく表示しているものを、各方面別に集計して作製したものである。)

#### (1) これは、戦闘による死体である。

水西門外、上新河、新河鎮、三叉河方面においては、12月12日夕から13日午前中にかけて、城内から脱出して南下しようとする軍団級の敵大集団と不意に衝突し、惨烈な近接戦闘をくりひろげたことは、前述のように、歩兵第四十五聯隊史、成友藤雄氏の手記、高橋義彦氏の証言などで明らかである。

#### (2) したがって、明らかに戦闘による遺棄死体である。中国側が何を根拠にして、虐殺と認定したか、理解に苦しむものである。

埋葬死体数が食い違ふ。紅卍字会、崇善堂の埋葬死体数は合計三万余であるが、本多勝一著「中国の旅」

の「南京虐殺概念図」(南京市提供)によると、五万四千虐殺と図示している。両者は余りにも大きく食い違い、死体数も甚大であるが、どのような調査をしたのであろうか。

盛世徹、昌開運は二、八七三体と言うが、これは「45聯隊史」「高橋義彦氏の証言」の死体数と近似している。三千内外という遺棄死体数が真実に近いのではなからうか。

#### (3) 埋葬期間と埋葬能力の疑問

紅卍字会の埋葬期間は、1月10日〜5月20日であるが、これに遅れて崇善堂が4月9日から参加し、4月23日には引き揚げている。埋葬を完了したのであるらうか、あるいは作業途中で崇善堂だけ引き揚げたのであろうか。甚大な死体の処理作業としては、妙な作業の仕方ではある。

また、崇善堂の埋葬能力については、雨花台、通済門外の部で批判したが、この水西門外での一日平均埋葬数一、二五二を加えると、実に七、四三七体の処理数となる。当時、もしも一日にこれだけの処理ができたとすれば、驚異的な埋葬隊ではある。このことを逆に考えると、崇善堂発表の埋葬死体数は、却って真実から程遠いことを証明することになりはしないか。

△未完▽

団体	区分		死体数			埋葬期間(日数)	一日埋葬数
	発見場所	男	女	子供	計		
紅卍字会	上新河	八、四七七	二	〇	二	一、一〇	平均 五四八
	水西門外	一、〇〇一	一	〇	一	一、二〇	最大 一、二二三
	漢中門外	一、一一三	〇	〇	〇	二二二日間	
	三叉河	一、三〇〇	〇	〇	〇		
崇善堂	水西門外	一八、四二九	三三六	二二二	一八、七八八	四、九	平均 二五二
	上新河	四、二二三				四、二二三	

### 南京攻略前後 編纂部

#### トラウトマン工作断章

##### △第三十七回訊問調書▽

昭和12年の終頃と思いますが、日本の陸軍参謀本部の馬桑木(注・敬信28期)中佐がオット(Troutman) 武官の許に参り、独逸は日支間の仲裁をして呉れる意見はないか、但し若し仲裁して呉れるにしても夫れはヒットラ自身が出馬して貰はねばならぬと云ふ意味のことを申したのであります。其処でオット武官は右申出を一方ではディルクセン(Diercksen) 駐日ドイツ大使に報告すると同時に、他方では之を独逸政府に伝達致しました。すると独逸政府からの返信が参りました。其の内容はヒットラ自身が日支間の仲裁に積極的に乗出すことは不可能であるが、一種のポストボックスとしての役割があるが、駐支独逸大使に於て、日支双方の意圖を聴取して之を双方に伝へて仲介をさせたと思ふが、其の外に日本の和平条件も知らせて貰ひ度いが、独逸政府の此の提案に對して日本側は果して如何なる回答をされるのか知らせて貰ひ度いと云ふことでありました。そして独逸政府は早速駐支大使トラウトマン(Oskar Trunz)を経て將介石に對して日本側と和平商議の用意があることを通告致しました。間もなくトラウトマンから報告が来て、日本側の申出の趣を將介石に伝へたところ將介石は承諾した。然し和平商議は無条件でなければならぬが、日本側の要求が果して如何なる点に在るのかを聞かせて貰ひ度いと云ふことであったと申して来たのであります。

斯様な次第でオット武官が日本の陸軍参謀本部に將介石の回答を問合はせますと、同参謀本部の返事は日本は特に過大な要求を提出するものではない。唯北支及上海に於ける政治的再編成を要求する程度に止まるであらうとのことでありました。同参謀部の斯様な意圖が將介石に取次がれますと將介石の方では成程夫れは表面上は結構だが、日本の陸軍参謀本部単独の意見であつては頼りにならないから、もっと公式な責任のある保障が欲しいとの回答を寄越したのであります。斯様な次第で、ディルクセン大使が將介石の右の様な回答を広田外相に伝へましたところ、日本政府内では未だ和平条件に對して判然とした意見が決まつて居らず、是から會議を開催して決定するもの様に思われましたが、広田外相としてはディルクセン大使に向つて、執れにしても日本の要求は過大なものではないであらうと云ふ様な意見を洩していたのであります。之に對してディルクセン大使としては今少し具体的な形で日本側の要求を示して貰いたいと云うことを申出て居りました。然るに其の間上海戦が日本側の勝利に終り、次で南京迄も日本軍に攻略されて仕舞いました結果、日本側の要求は次第次第に過大なものになつて参りましたので、ディルクセン大使は屢々苦情を述べて居り、將介石の方では到底承諾せぬ様な状態に陥り、トラウトマンも之では駄目だと申して断念して仕舞つたのであります。私は最初オット武官から日本陸軍参謀本部側の意見を聞きました時、そんなことは済まぬ、後で必ず段々と大きなものになるだろうと云う意見を述べて居たのであります。オット武官は之に反對して居たのでありますが、事實は矢張り私の意見の通りになりました。

私は以上申上げた経緯をディルクセン大使が独逸政府に送つた報告書を見せて貰つて読み、其都度要旨をラヂオでモスコウ中央部に通報しディルクセン大使の右報告は写真に撮影して伝送致しましたが、ソ聯側が此の交渉に對して最も関心を持つ点として私が通報した要点は第一には日本が將介石と和平を締結して北方即ちソ聯に向はうとして居たこと、第二には日支双方が果して如何なる要求を提出するか、之に依つて日支兩國の國力を推定することが出来ること、第三には此の交渉が



失敗した結果支那亦変が非常に長期化する見  
透しが付いたことでありませう。  
右通事を介し説聞けたるに相違なき旨申立  
署名捺印したり。

昭和十七年三月四日

東京刑事地方裁判所検事局

検事 吉河 光貞

被疑者 Richard Sorge

●ドイツ人の、第一次世界大戦後の支那にお  
ける商業上の苦心経営は、戦敗によって不平  
等条約が清算されたため、却って大きな成績  
を挙げた。支那政府は軍事顧問をドイツより  
招聘し、且つ他国より得られざる武器の購入  
をドイツより試みた。支那におけるドイツの  
地盤は、ヒトラー政権以前に、ナチ反対派の  
人々によって築き上げられたものであって、  
彼等はむしろ、商業上日本と競争の立場にあ  
り、而して、日本の対支政策には反感を持っ  
ていた。ヒトラーの時代となっても、彼等の  
立場は変更されなかつた。彼等は、自己の商  
業上の利益擁護のためにも、強く日支紛争の  
終結することを希望した。而してヒトラーも  
日支紛争の継続は、単に支那をソ連の懷中に  
追いやるに過ぎぬことになるので、極力日本  
の軍部に戦争行為の終結を勧告した。このド  
イツ側の態度は、日本参謀本部を中心とする  
軍の北方派の考え方と一致し、彼等のドイツ  
を仲介として、日支事変の終結を計らんとす  
る努力となつて現われた。当時参謀本部とド  
イツ大使館オット武官との連絡係第二部長  
奈木中佐は、石原第一部長の下に兼務を命ぜ  
られて(注・昭10・8・1 参本ドイツ班長  
12・8・15 参本附12・11・2 ベルリン駐  
在)、石原部長は馬奈木中佐を通じてオット武  
官と連絡し、日支和平の交渉を進めた。オッ  
ト武官は、(10月26日ころ)馬奈木中佐同伴、  
上海においてトラウトマン駐支ドイツ大使と  
会見して、日支和平斡旋に就て打合せた。

△重光葵『昭和の動乱』(上)中央公論社

●当時、馬奈木中佐(13・7・15 大佐進級)  
は、ベルリンに駐在、大島武官府とは別個に  
馬奈木機関長として、ドイツ側と協力して精  
力的に對ソ情報の収集にあたる。次席は日井  
茂樹中佐(31期)(のち昭13・7 謀略課高級課員  
14・3 謀略課長)であつた。

△當時在欧、情報関係者の回想による

●当時、蔣政権内における和平運動に、大き  
な影響を与えたのは、なんといつてもトラウ  
トマンの和平調停案であつた。二月三〇日  
から元且(昭和十三年)に至るまで、三日間  
に亘つて最高国防会議が開かれ和戦の問題を  
協議したのである。そして大晦日に至つてト  
ラウトマン大使の和平提議を受諾することに  
決定した。併せて蔣介石は行政院長の職を辞  
し、孔祥熙が代つて院長となり、張群が副院  
長になることも決定を見るに至つた。蔣介石  
としての自ら行政院長の職を退くことにより  
講和の責をとるのを避けようといふことであ  
つたろうと思ふ。元且は皆で蔣介石を囲んで  
丸一日いろいろと話合つた。例年ならば一  
同打ち揃つて、年賀の札を交わし中山陵に詣  
でるのであるが、この年は南京既に落ち、中山  
陵は、日本軍の占領するところとなつていた。  
孔、張はこの日正式に就任し、二日は白  
崇禧、閻錫山等が漢口を去つて前線に赴き、  
四日には蔣介石も開封方面へ去つて了つた。  
ここで後に残つてしまつたのであるが、しかし前  
が負はされてしまつたのであるが、しかし前  
後左右から色々な邪魔が入り、徒らに時日を  
空費しているうち、日本軍は遂に待ち切れな  
くなつて一月一六日の声明を發し、凡ては水  
泡に帰して終つたのである。

△安藤徳器編訳『汪精衛自叙伝』講談社

●トラウトマンは、ディルクセンよりもはる  
かに毅然として、リップントロップ(ナチ)  
の裏アシア外交に抵抗した人物であつた。  
△テオ・ゾンマー著『ナチスドイツ  
と軍国日本』時事通信社

●ヘルベルト・フォン・ディルクセン駐日大  
使は、一九三三年ナチスに入党している。  
△季刊『国際政治』47号 三宅正樹

△私は「刺身」が好きだつた。

△ディルクセン著『モスクワ・東京・  
ロンドン』読売新聞社

●現在、借行会員でゾルゲとメシを食つたこ  
とのある人に宇都宮直賢氏32期が健在であ  
る。昭和16年夏、南米赴任のためオットー大  
使主催の送別昼食会の席であつたといふ。

△回想録『黄河・揚子江・珠江』より

●「宇都宮大佐とは何度か会い、上海でも  
一、二度彼を訪ねたことがあつた。最後に会  
つたのは一九四一年の春であつた。」

△リヒアルト・ゾルゲの手記(二)  
みずす『現代史資料』197ページ

投稿

南京防衛兵力の一考察

48期 犬飼総一郎

南京戦における国民政府軍の防衛兵力につ  
いて、敵本氏は借行誌6月号で五万余と判断  
されておられ、これに対して小生の見積もりを  
「南京撤退掩護兵力一万余以下」として紹介し  
ていただいております。或いは過小評価として、  
この見積もりは、或いは過小評価として、  
ご批判が出るかも知れないので、説明を補足  
するとともに、そうした判断の根拠となる若  
干の視点を述べさせていただきます。

△紫金山とは

け防衛兵力を配置できる限度に言及されたも  
のが見当たらない。  
●小生は12月13日午前、歩兵第十九旅団長、  
草場辰巳少将20期に随行して中山陵に登り、  
旅団の奮戦の跡を眺望した。

紫金山第一峰から南斜面は三キロメートル  
内外、山頂は歩兵第三十三聯隊、南麓は歩兵  
第九聯隊が攻撃したわけだが、一見して禿山  
に近く、最前線の苦戦のほどが偲ばれた。

これに比べて歩兵第二十聯隊が攻撃前進し  
た中山門に通じる街道北側は、幾重にも重な  
る稜線上に森林が繞っていた。もつとも凹地  
を射撃する短刀火器陣地があり、前進を阻ま  
れることも多かつたであらう。

事実、中山陵を下りて参道の南側凹地で休  
憩したところ、そうした陣地を発見し、  
当番兵が「中に中国兵がまだ眠っている」と  
知らせて来た。出て来たところを当番兵二人  
が取り押さえようとするが、江南の兵士は強く  
乱闘となり、小生は中国語で「心配するな」  
と説得しようとしたが、標準語が通じない、  
己むなくピストルで射殺した。

昭和31年夏、再び中山陵に登つた。元日本  
軍代表団の一員としてである。

紫金山南麓は昔と変わらなかつた。やはり  
禿山であつた。一足先を下りて凹地に分け入  
り、日中両軍戦死者の冥柩を折つた。中国側  
の案内者たちは氣づかなかつたが……

中山陵下の参道、そして中山門まで一部を  
除いて森林地帯であつた。

この地帯に果たしてどれだけの兵力が防衛  
につけるであらうか。

湯水鎮—南京道の北側、中山門以東約四キ  
ロメートルの縦深には一個大隊で足りよう。

紫金山とて、二個大隊もあれば十分で、それ  
以上の兵力を配備できる地形ではない。それ  
だけの散兵壕は見当たらなかつた。なんと  
中山陵の中に立て籠つていた跡さえ見た。

しかし、中山陵もその参道の石畳みも、か  
すり傷さえ見当たらなかつた。わが砲兵は、  
旧蹟を避けて射撃したのである。

△兵団数と実兵力

●「刺身」が好きだつた。  
●ディルクセン著『モスクワ・東京・  
ロンドン』読売新聞社  
●現在、借行会員でゾルゲとメシを食つたこ  
とのある人に宇都宮直賢氏32期が健在であ  
る。昭和16年夏、南米赴任のためオットー大  
使主催の送別昼食会の席であつたといふ。  
△回想録『黄河・揚子江・珠江』より  
●「宇都宮大佐とは何度か会い、上海でも  
一、二度彼を訪ねたことがあつた。最後に会  
つたのは一九四一年の春であつた。」  
△リヒアルト・ゾルゲの手記(二)  
みずす『現代史資料』197ページ

方面軍特務部長の11月25日の中央向け報告として「敵兵力八十三個師、四十万内外」という判断がある。

11月20日、原田熊吉少将22期も「上海正面の兵力約八十個師」と語っている。同日、本海軍少将は「8月11日以降、三十四万の兵力を投入」、また21日、大河伝七内陸隊司令官は「八字橋約三キロメートル正面に、第八十七師と第八十八師約一万が猛攻してきた」と語っている。

この二個師は緒戦で既に約五千ずつにすぎない。南京では、八十七師が城内、八十八師が雨花台を守っていることになっているが、上海戦以降の損耗、とりわけ撤退中における兵士の逃亡で、それぞれ千名も残っていないであろうか。できれば、最も重要な紫金山に教導隊などを置くはずがない。

その他については「抗日戦史」で検討していただきたいが、南京周辺に約十万と約十五万配置されていたとは信じられないのである。たとえ、それだけの各兵団がいたとされているにしても、実兵力は殆ど消え失せていたはずであり、それを証する資料も既に散見できていくように思う。

▼「掃順工作」  
初期の華北作戦が終わったとき、北京の第一軍司令部の命令で(師団・旅団命令は当然)小生は河北省の某軍二個師の掃順工作に任じたことがある。

歩兵一個小隊・機関銃一個分隊を率いて、トラックで京漢線西方山中に入り、掃順部隊に法幣二万元を入れた風呂敷包みを渡した。途中、友軍はいない命がけであった。約二キロメートル離れた部落から相手の参謀長が出て来て、原っぱのまん中で落ち合い、双方とも通訳だけ連れていた。むろん、こちらの台端には味方を展開させてかくしておいた。ところが、相手は三十歳すぎの師団参謀長で軍の参謀長ではない。変だと思ったが、渡せばよいと思って握手して別かれた。師団であれば一万元でよかつたのではないか、という疑問が今日まで続いている。わが

第一軍司令部はサバを説かれたのではないか。この掃順部隊は後日反旗をひるがえし、関兵に行った誰かが殺されたという噂を聞いたように思う。

ともあれ、こうした経験があるので、南京防衛兵力も、軍団長、軍長、師長は定員分の給料を受け取っている手前もあって、これの兵力が実在した。しかし、南京陥落とともに日本軍が虐殺した。と上司に報告したことには自分のクビが飛ぶ、という「家庭の事情」があったのではなからうか。

というより、証言をなさる方がは、こうした視点をも踏まえて、もう一度想い出してみていただきたいのである。

▼中村重平氏の述懐 (歩兵第九聯隊聯隊旗手、49期、田無市南町四一九一〇)  
「第十六師団長・中島中将は、北支から中支戦線に転進するにあたって、次のように注意されました。  
「中支の戦闘は、北支のような香気な戦闘ではない。住民の抗日意識は北支とは比較にならない。中国軍と一体になって、頑強に抵抗するであろう。たとえ住民といえども、警戒を怠ることなく行動をせよ」  
果たせるかな、白茹口上陸後の追撃作戦間道道の住民によるゲリラ的襲撃をしばしば受け損害を出しました。ついには住民に対しても敵兵同様に警戒せざるを得ない状況となっていたように思います。

歩三八聯隊副官尾玉氏が「師団司令部より「俘虜を認めず、処置せよ」の命令に戸惑った」と述べられておられますが、師団長はどうか、そのような気持ちでおられたのではないのでしょうか。それが、あの激戦・紛戦下で「俘虜を認めず」という命令となつたのではないのでしょうか。私には、このように思えてなりません。」

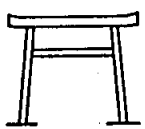
【訂正】8月号「南京戦史」(6)上段7行目の△12日から23日△は△12日から13日△、(7)上段41行△砲兵中尉△は△少尉△の誤りです。

### 特攻平和観音年次法要御案内

昨年12月、逝去された、21期菅原道大将軍が最も心を痛められておられた特攻烈士の英霊をお祀りするため、発起人代表の一人となられ建立されたのが、特攻平和観音であります。  
今年も左記により特攻平和観音の年次法要が営まれます。是非皆様でご参拝いただきたく、ここにご案内申し上げます。  
一、日時 9月23日(秋分の日)14時より  
二、場所 世田谷山観音寺 特攻観音堂  
世田谷区下馬四一九一四  
① 118-11  
三、バス  
① 渋谷駅東口  
② 渋谷駅南口  
③ 目黒駅西口  
④ 世田谷野沢行  
⑤ 三軒茶屋行  
何れも世田谷観音下車  
特攻平和観音奉賛会  
会長 竹田 恒徳  
先月号に9月27日となっているのは誤りにつき訂正致します

### 59年度偕行社総会

10月7日(日) 一〇三〇〜一五三〇  
九段下 ホテルグランドパレス  
千代田区飯田橋1-1-1  
① 03-1264-1111 地下鉄九段下駅  
会費 会員七、〇〇〇円 同伴者五、〇〇〇円  
行事内容  
一〇〇〇 受付開始  
一〇三〇〜一一五〇 自衛隊映画  
対機甲戦闘(30分)  
防衛大学校(40分)  
一一五〇〜一三〇〇 総会及び自衛隊音楽演奏  
一三三〇〜一五三〇 懇親会 軍歌演習約20分間  
出席者は34頁綴込みの葉書で9月20日までに申込み下さい



9月の月例参拝は奇数期と六幼  
9月19日(第三水曜日) 13時30分、到着殿集合